

保育実習における学びと課題  
—施設実習後の学生の振り返りから—

藤 重 育 子

愛知東邦大学

# 保育実習における学びと課題 —施設実習後の学生の振り返りから—

藤 重 育 子

## 目次

1. 目的
2. 事前事後学習の実践
3. 方法
4. 結果と考察
  - (1) 今年度の質問紙調査から
  - (2) 前年度の質問紙調査との比較から

## 1. 目的

保育実習（施設）に関しては先行研究でも注目されており、中でも授業計画や事前事後指導に関する取り組みが多く取り上げられている。保育士は、児童福祉法で「児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行う」と位置づけられており、その職務には保育所のみならず、施設で子どもの保育を担当することも想定されているため、保育士資格については施設実習の重要性も議論されている。

授業内容やカリキュラムについて、土谷（2006）は実習目的と実習課題を明確にし、施設の種別の理解や援助方法を福祉の授業と連携して意欲を持ち、前向きに臨める内容を行う必要性を示唆している。他科目との関連について小倉ら（2010）も、社会福祉施設で生活する児童を養護する方法などを学ぶ養護内容や障害児を理解する障害児保育などを事前に学ぶことが、施設実習の意味を高め、保育士の職域について深く理解する機会となることを述べている。実習に関する指導・支援のあり方において石山ら（2008）は、保育士養成機関では、共通の課題を持っており、「事前学習の内容」「実習時期」「学生の実習に対する姿勢」「過密なカリキュラム」「個々の学生に応じた個別対応」「施設側からの要求」など、数多くの課題を受けながら日々の実践や研究がなされていることを示している。また山田（2011）は、実践的な学びを深めるための実習事後指導として、実習個人カルテ作成の取り組みが有効であることを明らかにしている。最近の実践研究では、学生が自ら保育者になるという自覚のもとに、自分で気づき行動に移すことができるような指導が、保育者として働くようになった時を見据えての真の指導になる（小島，2013）ことや、ねらいを意識することによって充実した実習を展開することができ、その実習での学びが学生の育ちに繋がり、自らの保育観、子ども観を形成する基盤となる（鈴木ら，2013）といった、

現時点での指導にとどまらず、将来を見通した実習指導のあり方が取り上げられている。

実習学生の心理的变化に着目した研究では、山口（2007）は実習前後における短大生の心的発達を検討し、実習前と比較して実習後は「自己効力感」と「いきがい感」に有意差が認められることを確認したうえで、「施設実習」の経験が、学生の心的発達に影響を与えていることを述べている。また河野（2011）は、効果的な実習を行うためには、事前学習の内容充実を図るのはもちろんであるが、何よりも重要なことは学生自身の実習に対する取り組む意欲を高めることである。これらに影響を与えるものとして自己効力感があるのではないかと指摘している。このことから、カリキュラムや授業実践においての内容検討は必要であるが、学生の心情も理解した上での取り組みが第一であると思われる。さらに、実習後、実習先からの評価や学生自身の自己評価を比較検討した場合に日常の学習と実践の結果に差が生じていた（中原ら、2008）ことや、実習を経験した学生自らが、自分の実践を振り返り、自己評価を行うという活動は、その後の学びや活動の動機づけに影響を与え、個人の資質を高めていくことに繋がる（石山ら、2010）ことから、実習先施設と学生との意識の差や考えのずれを生じたままにせず、自己評価を与える機会も養成校の取り組みであると考えられた。

T短期大学子ども学科では、学内での講義や実技を通して、理論や知識、技能を身につけたものを2年次6月に9日ないしは10日の実践活動として実習を通して利用児・者と直接関わりながら経験的知識や実践への応用力を学ぶために施設実習を行っている。筆者は「保育実習指導」科目を担当しており実習事前指導、実習巡回指導、実習事後指導から保育者養成学生の保育実習（施設）に関する学生支援を行っている。中でも今回の研究においては、昨年度の質問紙調査結果を受けて実習事前学習に反映させて指導した学生の学びの確認や施設における学びについて調査するとともに、学生の事前学習の必要性について明らかにすることを目的として行う。またその結果をもとに、来年度以降の事前学習へ繋げたいと考えている。

## 2. 事前事後学習の実践

前述したとおり、2年生151名の実習期間は6月2日（月）から6月28日（土）のうち、宿泊型（15施設）は9日間、通園型（10施設）は10日間であった。施設種別については、児童養護施設10施設、障害児・者施設11施設、重症心身障害児・者施設2施設、一時保護所2施設の計25施設であった。

実習のねらいとして、各種児童養護施設及び社会福祉施設の機能や子ども（利用者）の生活の実態を把握すること、施設保育士の職務内容と役割および施設養護に関する知識・技能について体験を通して学ぶこと、の2点を挙げた。また実習目的として以下の4点を挙げた。施設の概要・機能・養護の実態について実践を通して理解し社会的養護の実際について学ぶこと、補助的な立場で子ども（利用者）と生活を共にし実践的な関わりを通して一人ひとりを理解しながら援助・支援のあり方について学ぶこと、など観察実習や参加実習を通して座学で得た内容を実習現場で体験的に学ぶ2点と、補助的な立場から施設保育士の専門性に触れながら施設保育士の職務内

容及び役割、また職員とのチームワークなどに関して体験を通して把握し施設養護及び養護内容への関心を高めること、施設保育士及び子ども（利用者）と生活を共にする中で、実習生自身が様々な働きかけを行うことにより養護技術を習得しながら将来の保育士としての自覚を高めること、など多岐にわたる保育士としての職務への関心を高め保育士像の見通しを持つ2点である。

事前指導に関しては、4月から5月にかけて全8時間で行った。前期として3時間、施設実習の意義や目的を確認し、施設実習の概要や機能と役割を指導し、施設保育士について学習する機会を設けた。またビデオ視聴で子ども（利用者）との関わり方、入退所の経緯や配慮、職員連携に至るまでを確認した。中期として2時間、事前訪問後に実習先の施設に関する事前学習ワークシート作成や実習に関する心構えなどの指導を行った。後期として3時間、実習日誌の書き方や実習中のマナー、施設養護に関する基本的専門用語（漢字を含む）や配慮事項の最終確認を行った。事後指導に関しては実習終了後7月に1時間、実習終了報告書のまとめを行い、課題シートの記入をさせた。またその際に、今回の質問紙調査を行った。なお、質問紙調査に関しては、昨年度と同様のものを用いた。

### 3. 方法

T短期大学保育者養成学生151名（男性9名、女性142名）を対象に、事後指導終了後に全28問からなる質問紙調査を行った。

表1に示す「施設実習における学び」として13問について「全くそう思わない」、「あまりそう思わない」、「そう思う」、「大変そう思う」の4件法でたずねた。表2に示す「実習前の事前学習の必要性について」として15問について「今以上学ぶ必要性を強く感じる」、「今以上学ぶ必要性を感じる」、「今の指導でよい」、「現場で学ぶ必要性がある」の4件法でたずねた。

表1. 質問紙13項目「施設実習における学び」

|  |
|--|
| 1. 日誌の書き方について学ぶことができた。                                   |
| 2. 利用者児の特性・個性について学ぶことができた。                               |
| 3. 利用者児への声かけについて学ぶことができた。                                |
| 4. 利用者児に対する直接的な援助方法やそのタイミングについて学ぶことができた。                 |
| 5. 利用者児に対する間接的な援助方法やその意義について学ぶことができた。                    |
| 6. 利用者児の成育歴・障害の症状・措置経緯・現状などを理解しそれに応じた援助の在り方について学ぶことができた。 |
| 7. 施設職員間の連携・協力について学ぶことができた。                              |
| 8. 施設と保護者との連携の在り方について学ぶことができた。                           |
| 9. 施設と地域社会の関係の在り方について学ぶことができた。                           |
| 10. 施設養護の社会的意義について学ぶことができた。                              |
| 11. 分からないことは担当職員または施設長に積極的に質問できた。                        |
| 12. 実習中、積極的にメモをとることができた。                                 |
| 13. 実習日誌は毎日必ず翌朝提出することができた。                               |

表2. 質問紙15項目「実習前の事前学習の必要性について」

|                                      |
|--------------------------------------|
| 1. 挨拶・言葉遣い・礼儀などのマナー                  |
| 2. 掃除や食事の仕方など日常生活の知識・技術              |
| 3. 利用者児の見方・捉え方など観察力・洞察力              |
| 4. 気づいたらすぐに対応するという行動力・判断力            |
| 5. 児童福祉・社会福祉に関する基礎知識・理解              |
| 6. 利用者児の発達過程の理解                      |
| 7. 利用者児の心情に寄り添った共感的なかわり方             |
| 8. 日誌や指導計画などの記録に関する基本的な考え方と書く力       |
| 9. 日々の生活支援を実践する際の創意工夫や応用力            |
| 10. 利用者児の発達に応じた多様な遊びや活動に関する知識・技術     |
| 11. 利用者児の経験や環境とのかかわりに基づいて遊びや活動を展開する力 |
| 12. 利用者児の安全・安心を守るために危機管理のできる心構え      |
| 13. 障害のある利用者児の保育や支援に関する理解            |
| 14. 利用者児への保護者への対応や支援の在り方に関する理解       |
| 15. 保育士としての使命感や責任感・愛情                |

## 4. 結果と考察

### (1) 今年度の質問紙調査から

#### 1) 施設実習における学び

施設実習における学びについて、13項目の質問に4件法でたずねた。その結果を図1に示した。

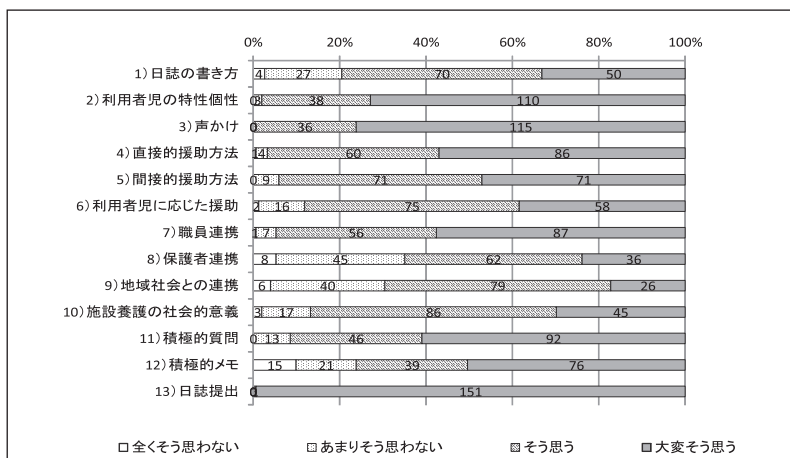


図1. 結果「施設実習における学び」 ※数値は人数を表す

表示の数値は人数を表す。施設実習の中で、多くの学びを獲得した内容として「利用者児の特性個性（問2）」、「声かけ（問3）」「直接的援助方法（問4）」、「職員連携（問7）」、「積極的質問（問11）」が挙がっており、いずれも「大変そう思う」割合が50%超であった。「そう思う」と合わせると、多くの質問項目が施設実習における学びとなっていることは明らかであり、学生にとって、個別の援助方法や声かけに関しては机上での学習ではなく実際に体験する実習での学びが得られたものと理解できる。またその際に、職員の連携している姿を見ることができたり、質問をしながら不明点を解決したりという予想ができる。「全くそう思わない」、「あまりそう思わない」と多くの学生が選択した質問項目については、「保護者連携（問8）」、「地域社会との連携（問9）」が30%を超えていた。個人情報の点などから、実習生とは敢えて遠ざけなければならない施設もあるだろう。また10日前後の実習では確認できない事項であったかもしれない。しかしながら、どちらの質問項目においても「大変そう思う」、「そう思う」を合わせると60%以上であり、学生がそう感じているということは、実習生に対してできるだけ多くの機会を見せてくださり経験をさせて頂いたと理解でき、大変有難いことであった。

#### 2) 実習前の事前学習の必要性について

実習前の事前学習の必要性について、15項目の質問に4件法でたずねた。その結果を図2に示した。表示の数値は人数を表す。施設実習を終えて事前学習を振り返った際に、全ての項目において「現場で学ぶ必要がある」と回答している学生は少ない結果であった。そして「今以上学ぶ必要性を強く感じる」、「今以上学ぶ必要性を感じる」と、選択した質問項目については「福祉

に関する基礎知識・理解（問5）、「発達過程理解（問6）」、「共感的かかわり（問7）」、「遊びや活動の知識技術（問10）」、「遊びや活動の展開力（問11）」の5項目が40%以上であった。これらから、実習前の基礎的な知識や技術に関してより丁寧に扱い、学生が理解できるよう努めることが課題となった。また、この事前学習とは、大学内における実習事前指導を指しているため、授業担当者として来年度の指導内容に反映させていくべきであり、同時に他科目授業担当者との連携をさらに図る必要があると考えられた。

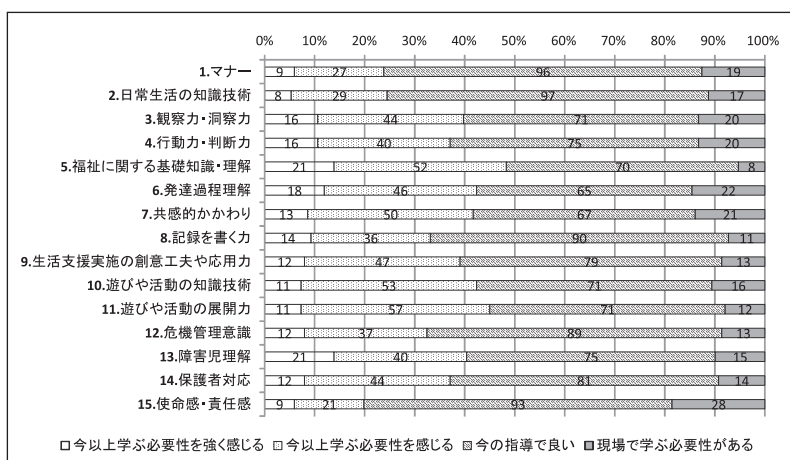


図2. 結果「実習前の事前学習の必要性について」 ※数値は人数を表す

## (2) 前年度の質問紙調査との比較から

前年度の質問紙調査結果との比較を行った。中でも平成26年度の実習事前指導においては、前年度の調査結果を参考に、支援のあり方や援助方法についての基礎知識を深めること、学生の記録に関して量と質の向上に力を注いだ。それらの成果について、変化の見られた部分に関して、図示した。いずれも調査対象人数が異なるため、それぞれ割合を算出し表示した。

### 1) 施設実習における学び

施設実習における学びについて、13項目のうち注目した3項目について比較した。それぞれ図3～5に示す。

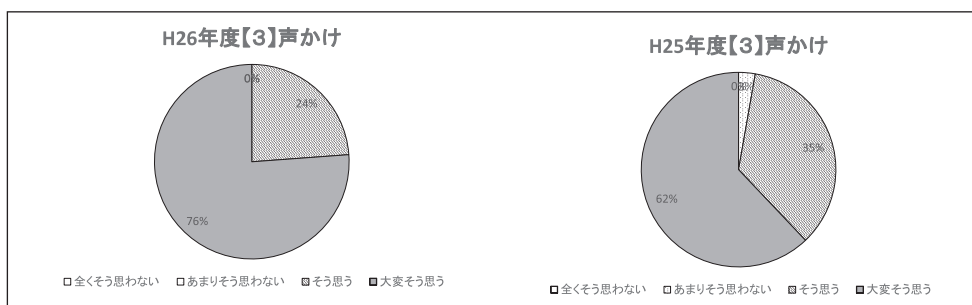


図3. 「施設における学び」【3】声かけ 年度比較

図3は「声かけ（問3）」の回答に関して年度比較を行ったものである。今年度の実習生は、「大変そう思う」、「そう思う」を合計して全員が施設における学びであると回答しており、声かけの重要性を認識した様子が見てとれる。さらに、「大変そう思う」という回答が7割を超えており、利用者（子ども）に対して、施設職員が声かけしている場面に遭遇したり、自らが行った声かけに意義を見出したりしていることが考えられる。

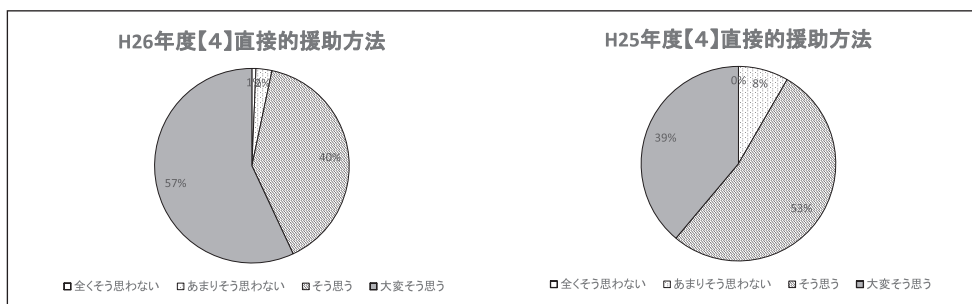


図4. 「施設における学び」【4】直接的援助方法 年度比較

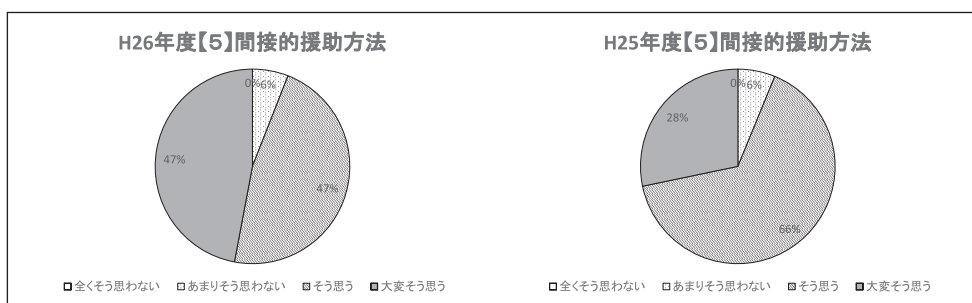


図5. 「施設における学び」【5】間接的援助方法 年度比較

図4は「直接的援助方法（問4）」の回答に関して、図5は「間接的援助方法（問5）」の回答に関して年度比較を行ったものである。両援助方法において、「大変そう思う」という回答が15%以上増加していた。このことから前述した声かけに加えて、援助や援助者の必要性を感じ取ったものと想定できる。また、施設実習において、身体に触れる関わりや道具・器具を使用した援助場面に多く対面していたことは想像でき、事前学習の中では具体的な方法について捉えがたかったが、実際に施設職員の援助場面や自らの行動などで理解したものであると考えられる。間接的援助方法として、個人情報を扱うという懸念事項はあるものの、実習生自身が、利用者（子ども）にとって何が最も重要視されるべきなのかを施設実習現場で学ぶという姿勢に表れているように思われた。また、昨年度の「施設における学び」について「あまりそう思わない」という回答が見られた点については、具体的にどういった援助があり、それぞれがどのような意味をなしているのかが理解できていないまま実習を経験していたことも考えられるため、これまでに以上に事前学習から実習へ円滑に移行できるよう指導内容の検討も必要になるだろう。

## 2) 実習前の事前学習の必要性について

実習前の事前学習の必要性について、15項目のうち注目した5項目について比較した。それぞれ図6～10に示す。

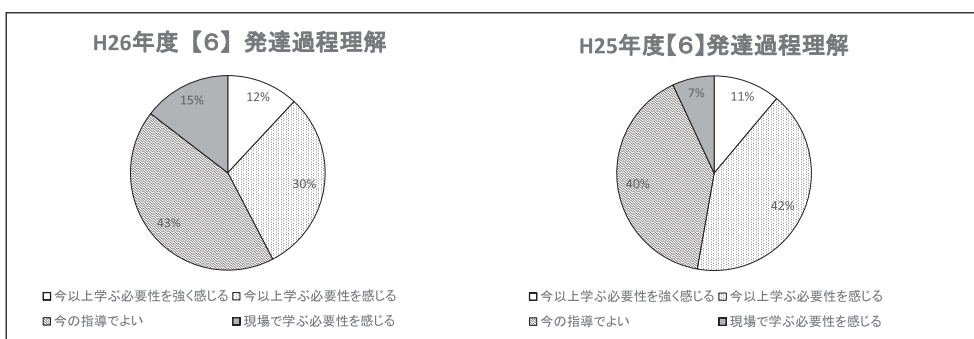


図6. 「事前学習の必要性」【6】発達過程理解 年度比較

図6は「発達過程理解（問6）」の回答に関して年度比較を行ったものである。昨年度と比較して10%程度減少しているものの、それでもなお計42%の学生が「今以上に学ぶ必要性を感じる」と回答していた。発達過程という概念は幅広く、また施設の種別も多様なことから、事前指導のみならず他科目との連携や学生の学びの深さが影響してくるものと思われる。

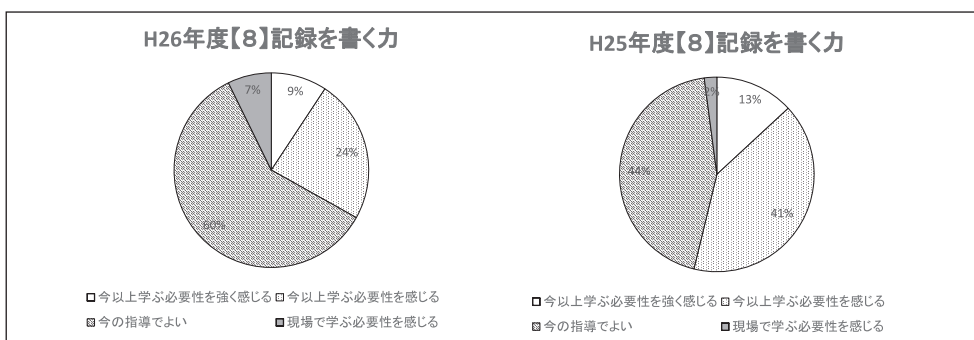


図7. 「事前学習の必要性」【8】記録を書く力 年度比較

図7は「記録を書く力（問8）」の回答に関して年度比較を行ったものである。今年度は、記録や指導案、実習日誌などの書記について力を注いだ。中でも今回の結果は、「今の指導でよい」という回答が16%増加しており、また「今以上に学ぶ必要性を感じる」という回答が減少傾向に見られることから、今年度同様に指導するほか、さらに詳細に具体例を交えて記録を取る練習が必要であるだろう。しかしながら、土谷（2005）が事前学習を積極的にできる工夫、文章を書くことを全教員に協力してもらい迅速かつ的確に処理できるような工夫をしなければならないと主張していることから、実習担当者のみでなく様々な視点からの指導があることによって成り立つものであると考えられる。



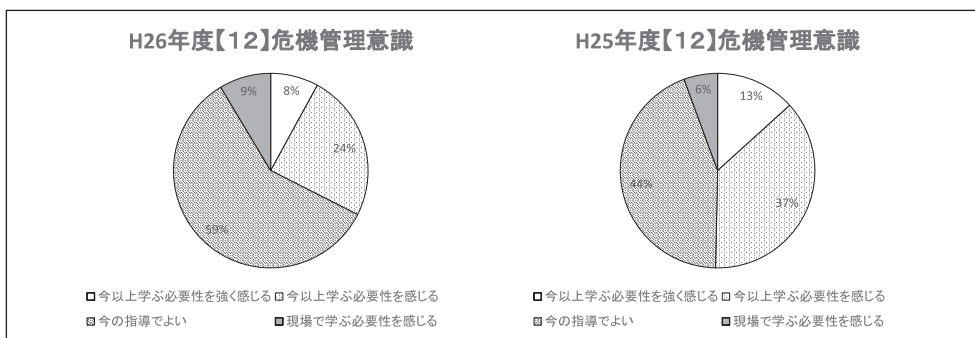


図8. 「事前学習の必要性」【12】危機管理意識 年度比較

図8は「危機管理意識（問12）」の回答に関して年度比較を行ったものである。「今以上に学ぶ必要性を感じている」学生が今年度は20%減少していることから、実習生自身がより現実的に意識していることがうかがえる。また指導においても施設や利用者（子ども）の養護に加えて、自身の安全や安心も重要であることを伝えていたためこのような結果になったことと推察される。しかしながらリスクマネジメントに関しては、職種に関わらず必要であるため、施設実習以外の様々な場面での想定を設けて指導する必要があるだろう。

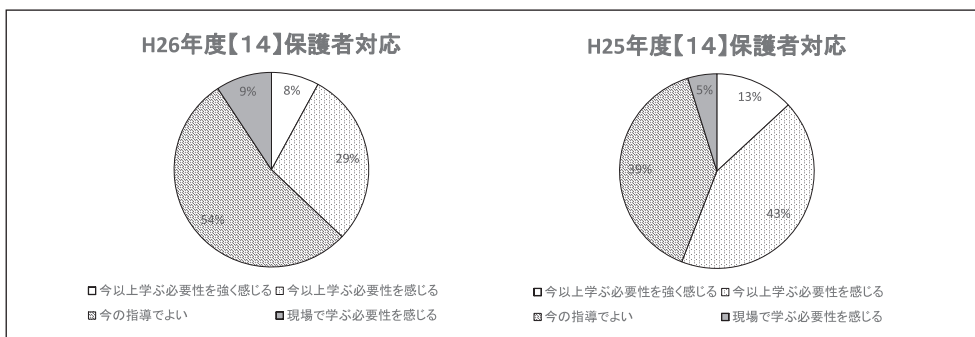


図9. 「事前学習の必要性」【14】保護者対応 年度比較

図9は「保護者対応（問14）」の回答に関して年度比較を行ったものである。「今以上に学ぶ必要性を感じる」という回答が、昨年度と比較して25%減少していた。しかしながら、それぞれの施設種別によるものや、個人情報との関係で把握できない事項が予想できることから、この項目に関しては、実習生が直接触れる内容としては困難であっても、将来の現場を見通して理解を深める必要がある事項であるだろう。今後も施設職員の協力を得ながら指導に取り入れていきたいと考えている。

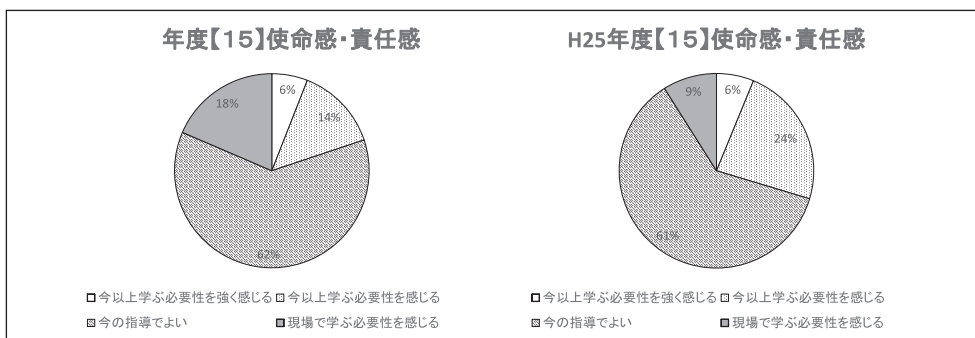


図10. 「事前学習の必要性」【15】 使命感・責任感 年度比較

図10は「使命感・責任感（問15）」の回答に関して年度比較を行ったものである。わずかではあるが、「今以上に学ぶ必要性を感じる」という回答が減少し、「現場で学ぶ必要性を感じる」という回答が増加している結果となった。使命感や責任感については事前の指導において言及したところで限りがあり、臨場感には欠けると思われる。やはり現場において職員の援助方法に触れ、利用者（子ども）に関わることで目覚める感覚であると再認識した。また、村田（2013）は報告の中で保育実習の成果について、学生は、丁寧なプロセスを踏みつつ支援に取り組んでいる職員の姿勢を捉えることができると示しており、これらの項目については、体験的に学生が現場で学ぶべき点であるようにも感じられた。

以上の結果から、養成校での学び施設実習先での学びについて、多少ではあるものの学生の中に意識として芽生えはじめていることが分かった。「記録を書く力（問8）」に関しては今年度においても計30%以上の学生が「今以上に学ぶ必要性を感じる」ため、筆記に関する学生の能力を伸ばす努力が必要であろう。一方で、「発達過程理解（問6）」、「危機管理意識（問12）」、「保護者対応（問14）」、「使命感・責任感（問15）」に関しては、「現場で学ぶ必要性を感じる」割合が多くなっている。この点に関しては、養成校での学びとしては限界があるように思われる。そのため今後はさらに、それぞれの機関が特色を活かして学生指導にあたることが望ましいと考えられた。

### 【引用文献】

- 石山貴章・安部孝（2008）「保育士養成機関における『施設実習』の現状と課題（1）—短期大学『施設実習』に向けた事前指導を通して—」九州ルーテル学院大学紀要visio第38号 pp. 157-170
- 石山貴章・安部孝・田中誠（2010）「保育士養成機関における『施設実習』の現状と課題（2）—実習事後指導を通じた『自己評価』と『気づき』に関する分析から—」九州ルーテル学院大学紀要visio第40号 pp. 59-72
- 河野清志（2011）「保育学生の施設実習に対する自己効力感尺度の作成について」山陽学園短期大学紀要第42巻 pp. 29-35

- 小島千恵子 (2013) 「実践力を身につけるための実習プログラムの構築—学生の実習後の「保育者の資質と力量」についての振り返りの記述から—」名古屋柳城短期大学研究紀要第35巻 pp. 173-181
- 村田紋子 (2013) 「社会福祉施設における保育実習の成果と課題に関する一考察—『権利擁護』の視点から—」小田原女子短期大学研究紀要第43巻 pp. 18-29
- 中原大介 (2008) 「これからの保育実習指導についての一考察—児童福祉施設実習（居住型）を中心に—」大阪健康福祉短期大学紀要第7号 pp. 185-194
- 小倉毅・土谷由美子 (2010) 「保育士養成課程における施設実習に関する課題—アンケート調査からの一考察—」 pp. 77-87
- 鈴木方子・大岩みちの (2013) 「保育者を目指す学生の育ちを願って—実習における課題とねらいの指導—」岡崎女子短期大学研究紀要第46号 pp. 1-7
- 土谷由美子 (2005) 「保育実習に関する意欲と現状について—学生のアンケートを中心に—」中国学園大学紀要第6号 pp. 167-171
- 土谷由美子 (2006) 「施設実習に関する意欲と現状についてⅡ—学生のアンケートを中心に—」中国学園大学紀要第7号 pp. 85-90
- 山田秀江 (2011) 「実習事後指導に関する一考察」四條畷学園短期大学紀要第44巻 pp. 25-31
- 山口直範 (2007) 「養護施設実習における短大生の心的発達効果」岡山学院大学紀要第30号 pp. 79-82

受理日 平成26年9月29日